

中上健次「蛇淫」論 ——「事実の肯定」をめぐる——

旦部辰徳

はじめに

〈親殺し〉という「悪い夢」を、作家としていかに引き受けるか。中上は最も近い他者へ向けられる、最も重く受け止められてきた暴力である〈親殺し〉を、物語にいかに定位しうるかを、芥川賞受賞作である「岬」(『文学界』・1975年10月)執筆前後の時期において、エッセイや短編を通じ模索していた。本論文では、〈親殺し〉をめぐる中上の諸エッセイと、同一主題を持つ同時期の小説作品「蛇淫」(『文芸』・1975年9月)との関係を考察する。

「蛇淫」は、不良上がりの主人公順が、恋人であるケイとの仲を引き裂こうとする両親に抗い両親を殺害する結構を持つ、「岬」執筆後まもなく書かれた短編である¹。作家としてのキャリアの極初期に「世界はいつまでもギリシア悲劇を上演している」と詩行に記し、父殺しのオイディプスや母殺しのエレクトラを諸作の基層とし続けてきた中上が、唯一字義通りの〈親殺し〉を描いた特異な作品が「蛇淫」である。

中上自身が、エッセイ「夢の力」で、「蛇淫」のタイトルが上田秋成「蛇性の姪」を参照していることを仄めかし、また、千葉県市原市の両親殺人事件を報じた新聞記事を直接の材源としていることを明示していることから、典拠との関係や、新聞記事に取材する執筆方法に関する研究がこれまでなされてきた。高田衛は、両親の殺人で幕を閉じる「蛇淫」が、一度は蛇の化身たる女に魅入られ人外の世界に組み入れられた主人公豊雄が幾多の怪異を苦心して退け、最終的に人間界＝家の秩序に再編入される人間成長譚としての「蛇

¹ 中上は、「岬」と「蛇淫」の執筆時期について、「私の近況」(『中上健次全集14』、集英社、347頁、1996年7月24日、初出『新刊ニュース』1976年4月1日)で「岬を書いた後、次々小説を書いた。(……)「蛇淫」「荒くれ」「水の家」「路地」「雲山」「荒神」方々に謝り、お願いした」と記している。高山文彦が、『エレクトラ—中上健次の生涯』(文芸春秋、2010年8月10日、290頁)で、中上が編集者に「岬」を手渡した日を1975年7月7日と比定していることから、「蛇淫」の執筆時期はそれ以降～同年9月の間となる。

性の姪」に対するパロディ的な翻案である可能性を指摘し²、嶋田彩司は「蛇姪」が道成寺説話など書承の蛇女房譚に拠る「蛇性の姪」の要素を一部引用しつつも、非書承神話として中上の生地新宮に伝わる「浮島の蛇伝説」をも取り込み、秋成以前の原型的な物語への遡行を中上が試みようとしていた可能性について論及している³。また、井口時男は、「蛇淫」で中上が、他者が引き起こした〈親殺し〉という凶行の端緒に「父—母—子」間の原型的な葛藤があったことを見取り、殺害という親への決定的な反旗を中上自らのうちにある抑圧された欲望＝「自分の見る悪い夢」と捉え共振することを通じて事実を虚構の水準に変換する「夢の力」という手法を試みたことを浮き彫りにした⁴。これらの研究は、中上が近代的な語りの装置としての「小説」と説話・神話を対置し、後者を「小説」の「法」を脱臼させる力を持つ「物語」として可能性を見出していく点や、初期作品群から紀州三部作に至る転換期の創作方法を詳述している点で、重要な成果である。

しかし、中上は「夢の力」以外のエッセイでも〈親殺し〉に言及している。そこには、現代の青年による〈親殺し〉と春雨物語所収の「樊噲」における〈親殺し〉を対比し、主人公太蔵の自らの大罪を一向だにしない超倫理的態度から「事実の肯定」という概念を引き出しそれを称揚しつつも、そこまでには至れない青年の弱さに共振してしまう中上のアンビバレンスが露呈している。さらに埴谷雄高の「自同律の不快（私は私であるということの不快）」が接ぎ木され、〈親殺し〉をめぐる中上の言説は「夢の力」を中心に捉えるよりはるかに輻輳的な様相を見せているのだ。これは、先の諸氏が設定した問題範疇からこぼれる論点である。したがって、「蛇淫」読解の補助線はいまだ十分に汲み尽くされてはいないと言える。

そこで本論文では、〈親殺し〉をめぐる中上の諸言説を如上の未検討の論点を加味して精査することを通じ、そこに伏在する中上の問題意識を捉え直し、それに照らす形で「蛇淫」の新たな読解を可能にすることを試みる。

1. 肯定と逡巡—〈親殺し〉という「事実」をめぐる

² 高田衛、「『蛇性の姪』の後裔たち——秋成・鏡花・中上健次」、「シンポジオン」3号、1998年3月。

³ 嶋田彩司、「典拠と批評——「蛇性の淫」と中上健次」、国文学研究(136)、34-35頁、2002年3月。

⁴ 中上健次、『蛇淫』（講談社文芸文庫）、講談社、241頁、1996年9月。

本章では、中上における〈親殺し〉の主題について、その浮上の過程を整理し、続いて同主題について書かれたエッセイの内容を検討したうえで、そこに〈親殺し〉をめぐって相反する価値基準が立ち現れていることを確認する。さらにその価値判断に〈自己の変容〉という尺度が設けられていたことを見てゆく。

1-1. 回帰する〈親殺し〉

中上が〈親殺し〉を中心的な話題として初めて論じたのは、連載エッセイ「地図の彼方へ」(『やんろーど』・1975年8～11月)の「事実の肯定 悪の自由」(10月1日)においてである。「地図の彼方」は、その他に「肥大した事実」「トロツキスト気質」「犯罪はレトリックである」の三篇からなるが、〈犯罪〉を共通主題としている。

中上の〈犯罪〉に対する注目は、詩作を中心とした活動をしていた1969年頃から続く。それらについてここでは詳述しないが、中上の〈犯罪〉論において、〈親殺し〉が主題として浮上してくるまでの大まかな変遷については、先に挙げた「夢の力」で以下のように触れられている。

連続ピストル射殺事件から千葉の親殺しと自分の興味が移ってきて、今、歌手の愛人殺しを考えている私自身に驚く。三十の齢を目前にして言うのもヘンだが、大人になってきたと言おうか、成熟してきたと言えよいか。そして私は、自分の興味の移り具合に、犯罪が絶えずその出発であり到着である他者との軋み具合の変化を考えるのである。社会というものの変化である。連続ピストル射殺事件の犯人には他人あるいは社会とは、実態のない顔の定かでないものであった。この歌手には、それらがはっきりと見えている。抽象と具体ほどの違いがある。⁵

後にマルクス主義を援用し、自己の凶行の基底に貧困を生じさせる社会構造があるとした永山則夫の犯行と、「千葉の親殺し」「歌手の愛人殺し」では、切り結ぶ「他者」の位相が全く異なる。社会構造という「抽象」的な他者へ

⁵ 中上健次、「夢の力」、『中上健次全集14』、385頁(初出『文學界』、1976年7月1日)。

の憎悪を根底に置く〈犯罪〉から、親や愛人という「具体」的な他者へと向けられた〈犯罪〉へという、異なる類型の〈犯罪〉間に「社会というものの変化」という関係を見た中上の判断は、あくまで恣意的なものなのだ。中上の〈犯罪〉に対する関心は、一貫して「ひとつネジがまわりすぎるとこの身がやってしまうものとして」それを捉えるという感性に裏打ちされているが、先の〈犯罪〉の「興味の移り具合」は、中上の作品の主題系の推移とほぼ相即する。そこには、東京でジャズと薬物に溺れあてどない日々を送るさなかでいられちを募らせるも、その怒りの具体的な矛先を欠如させたまま自傷的にそれを内破させるか卑小ないたずらで気を紛らすしかない窮境に陥る「僕」を中心に描いた初期小説作品群から、生地新宮の輻輳的な地縁・血縁に対する愛憎相半ばする感情に捕われ、時に即時的な暴力へと傾くナイーブな「彼」を描く作品群への転節が徴づけられてある。小説作品の素材が、地縁・血縁という卑近な「具体的」対象を中心に採られるようになったことで、「親殺し」や「愛人殺し」が焦点化されたのだ。

だがそもそも、中上の〈犯罪〉への関心は、その基端を永山則夫の類を見ない悪行に持つわけではない。小説を本格的に書き始める以前、初期詩作品群のいくつかの詩行に注目すれば、そこにはすでに〈親殺し〉が度々書き込まれているのだ。「歌声は血を吐いて」(『詩学』、1967年3月30日)の第四連(①)と、「故郷を葬る歌」(『さんでージャーナル』、1968年9月1日)の一節(②)を参照されたい。

①白い朝、くだけてとびちつたストーブの管がおれの軀に不快なしみをのこす。おお、そのオイジプス王の仮面はおれだけのものだ。世界はいつまでもギリシア悲劇を上演している。いまごろハレルヤをうたうのはよくない。⁷

②母千里を殺せ

父、七郎を殺せ、留造を殺せ⁸

⁶ 中上健次、『夢の力』(講談社文芸文庫 現代日本のエッセイ)、講談社、87頁、1994年8月10日。

⁷ 中上健次、「歌声は血を吐いて」、『中上健次全集 14』、34頁(初出『詩学』、1967年3月30日)。

⁸ 中上健次、「故郷を葬る歌」、同上、48頁(初出『さんでージャーナル』1968年9月1日)。

ここからすれば、〈犯罪〉への注目のいきさつは、「連続ピストル射殺事件から」ではなく、〈親殺し〉から語り始められるべきだったのであり、ここに一つの迂回があることがわかる。つまり、〈親殺し〉への関心が浮上してくる経緯は、単なる関心の推移なのではなく、潜在していた〈親殺し〉の欲望が、他者の〈親殺し〉の事件に触れて顕在化する、という構図に改められうる⁹。それ故、中上にとって、〈親殺し〉は他の〈犯罪〉と異なる重要性を帯びて論じられるべき対象となる。

1-2. 「事実」の処法をめぐる逡巡

では、連載エッセイ「地図の彼方へ」第三回の「悪の肯定 悪の自由」で〈親殺し〉はどのように語られるのか。中上が取り上げるのは、東京新聞で当時報じられた茨城県の二十五歳の青年が起こした〈親殺し〉である。連載初回「肥大した事実」の書き出しを、「犯罪とはなんなのだろうか？と思う。（……）何故、まっとうでなくなってしまうのか、何故踏みはずしてしまうのか？」¹⁰と始めているように、中上のここでの当初の関心は〈親殺し〉の機序に向けられていたと見てよい。だが、早くも二段目で、それを「関係の軋み、不和としか、僕の眼には写らない」と結論づけ、原因の遡及は速やかに手仕舞ってしまう。中上の議論の焦点は、青年が自らの〈親殺し〉の「事実」の受け止め方に合わされていく。その際に、青年の対蹠点として上田秋成「樊噲」が呼び出されてくる点に注目したい。

朝、めざめる。〈父殺し母刺す〉とは、誰でも、一度は、少年から青年に通過する時やった行動ではある。

それがたまたま現実の犯罪としてあらわれなかっただけだ。ここでもまた、架空と現実というものに出くわす。

現実とは、一体なんだろうかと思う。青年が、父を殺し、母を刺して立ち尽くしていたというのは、なにやら芝居じみているが、彼が留置場

⁹ 四方田犬彦は、『中上健次全集 14』月報所収の「中上健次の初期の詩について」において、紀州三部作で描かれた主人公の親族による惨事の原因が、初期詩作品群ですでに記されていることを指摘している。

¹⁰ 中上健次、「地図の彼方へ」、『中上健次全集 14』、249 頁(初出『やんろ一ど』、1975 年 8 月 1 日、第一巻第一号)。

で一晩ねむり、めざめることを考えると、人ごとながら、その朝が永久にこないほうがいいと思う。もし、小説なら、そこで終わっていいのである。だが、現実、事実はそこに現にある。この事実を消す方法がないものだろうか？

上田秋成の「樊噲」は、いってみれば、この事実というものに対する一つの解決の仕方を教えてくれたものだ。つまり、事実の肯定というものである。それを悪といおうか？「親を殺した、たしかだ、それがどうした？てやんでえ」という言葉だ。

ピカレスク、悪漢小説の胸のすくような味、自由さは、事実の肯定、悪の明瞭さなのかもしれない。(.....) この親殺しの青年の、悪ではない悪を見て共振れするぼくから、「樊噲」までの道のりは遠いといえる。アイデンティティの不確かな、激しく不安な、この青年こそ、いまの、この小説家である。「樊噲じゃ、樊噲じゃ」と口にするまで、まだいくばくかの時間が要る。¹¹

中上は、青年と、同じ〈親殺し〉の主題を持つ上田秋成の「樊噲」の主人公大蔵とを比し、〈親殺し〉という「事実」に対する両者の態度の違いを抉り出し、後者を「事実の肯定」という処法として結んでいる。「樊噲」は、伯耆の国に住む太蔵という素行不良の青年が、父兄を殺害の後脱藩し、その先々でさらに罪を重ねるも、ある法師との出会いを機に最終的に仏心に目覚め得度するという悪人正機譚である。連載最終回「犯罪はレトリックである」で再び「樊噲」に触れる箇所も参照すれば、中上は、仏教における大罪・五間無業の一つである親殺しを犯して後も仏罰を一向恐れることなくさらに罪を重ね続ける太蔵の悪行に、自らが招いた親の死という凄惨な「事実」を「心理のまっさつ」によって反省の契機を排し、罪の意識へと転化させることなく善悪の彼岸で「肯定」する超倫理的な認識の処法の顕現を認めているのだ。中上が「地図の彼方へ」で展開した一連の〈犯罪〉論においては、殺人の決行者は「何故、事実といまここに在る自分がかかわり合うのか、わからない」というように、常に自らの殺傷の欲望と実現された行為との間に飛躍を認めなければならない¹²。「事件、事実はあつてなく、突然、現出する」ものであり、殺人の決行者の欲望とは因果的に切断された外部として現前するために、

¹¹ 中上健次、前掲書、254・255頁。

¹² 中上健次、前掲書、250頁。

決行者を圧倒し「拘束」するのだ¹³。「事実の肯定」は、こうした「事実」による復讐、「事実」が持つ転倒の力を無効化し、「事実」からの「自由」をもたらす術なのである¹⁴。

だが、中上は「樊噲」の太蔵が体現する「事実の肯定」を最大限評価しながらも、「この親殺しの青年の、悪ではない悪を見て共振れ」するというように、アモラルの極致には至れない殺人者たる青年への共感を仄めかし自らをそこに投影するという微妙な態度をみせる。ここには、「事実の肯定」への賛意と、そこまでには至れないという逡巡の、分裂的な様相が現れている。

1-3. 自同律の失調に伴う痛み

だが一体何故、中上は太蔵を称揚しつつも青年に「共振れ」するのか。その判断はいかなる基準に依るのか。連載最終回「犯罪はレトリックである」の一節を再度参照することから検討を始めたい。

(……) 私は、私であると言うことが不快であると同時に、他者からは私は私でしかありえないだろうし、また、事実の肯定、肯定の運動を識っている者には、私は私でしかありえないということでもある。¹⁵

「私は、私であると言うことが不快である」という言辞は、埴谷雄高の「自同律の不快」に由来する¹⁶。自同律とは、〈A は A である〉というかたちで、主辞の A と賓辞の A がイコールで結ばれている論理式を指す。『死霊』の名高い一説「《俺は——》と呟きはじめた彼は、《——俺である》と呟きつづけ

¹³ 中上健次、前掲書、249 頁。

¹⁴ 中上は、小川国夫との対談「闇の力——ディオニソスを求めて」(初出『文藝』、1976 年 2 月)においても、「樊噲」を「事実の肯定が自由をもたらす」「ピカレスク・ロマンの傑作だ」としている。『中上健次全発言 1970～1978』、集英社、49 頁を参照。

¹⁵ 中上健次、「地図の彼方へ」、前掲、256 頁(初出『やんろーど』、1975 年 11 月 1 日、第一巻第四号)。

¹⁶ 中上は様々なエッセイにおいて自同律の不快に言及している。1966 年 8 月に『文藝首都』で発表された「犯罪者永山則夫からの報告」が初出。1974 年 2 月には『日本読書新聞』にて「自同律に不愉快を表明するぼくの自意識」という評論を発表し、自らの内に「単純な、誕生し、生き、生殖し、死ぬという自然」を疑い、「不愉快」になる「ぼく」がいると述べている。

ることがどうしても出来なかったのである」¹⁷にて表明される「自同律の不快」は、主辞としての「私」と賓辞における「私」を同一であるとみなすことを不快とする論理的かつ感性的な判断である。この「自同律の不快」に共感している中上にとって、「私は私でしかありえない」「事実の肯定、肯定の運動を識っている者」は自同律に捕らわれた不快の状態にある存在となる。それ故、中上は、「事実の肯定」を「識っている者」である「樊噲」の太蔵ではなく、「アイデンティティの不確かな、激しく不安な」＝自同律が失調した状態にある青年に「共振れ」するのである。

しかし、「アイデンティティの不確かな、激しく不安な、この青年」は、「私は、私であると言うことが不快である」という命題の裏「私は、私ではないと言うことが不快ではない」の状態にはいない。青年は紛れもなく、自らが引き起こした〈親殺し〉という「事実」に圧倒され、精神の痛苦を抱きながら立ち尽くすしかない状態にあるからだ。その意味で、中上においては、「自同律の不快」はさらに「自同律の失調に伴う痛み」へと変転してゆく。「私は私である」ことは耐え難く不快だが、「私は私ではない」ことも歓待されるべき事態ではない。埴谷の言うように「自同律の不快」によって担保された「見事な、美しい変容を重ねる力」はここには現れていないのだ¹⁸。少なくとも、〈親殺し〉を論じる文脈では、中上は「共振れ」という身振りを通じて、〈自己が、変容を強いられた局面に伴う痛み〉を把握しようとしている。ではさらに、この時、青年は一体何に変わろうとしているのか。「私は私である」の賓辞に挿入されるべきものとは何か。この問いへの一つの応答が、「蛇淫」にしたためられている。

2. 「蛇淫」における「子」の「弱さ」

先章では、重大な主題として再浮上してきた〈親殺し〉について、中上がそ

¹⁷ 引用箇所の後には、以下の文言が続く。「主辞と賓辞の間に跨ぎ越せぬほどの恐ろしい不快の深淵が亀裂を拡げていて、その不快の感覚は少年期に彼を襲ってきた異常な気配への怯えに似ていた」埴谷雄高「二章 死の理論」『死霊Ⅰ』『埴谷雄高全集 3』

¹⁸ 例えば山田稔は「紙の月／埴谷雄高と西田幾多郎 2」（日本文学誌要、第 85 号、43 頁）にて、自同律の不快に支えられている自己が有しうる運動性を『死霊Ⅰ』「二章 死の理論」の一節を引きつつ「存在の変容」と捉え、その「見事な、美しい変容を支える力は、宇宙を動かす最も単純な力」ではないかとまとめている。

の決行者の心理に焦点をあて、大罪を犯したという「事実」を一向だにせず「肯定」してみせる「樊噲」を賛じながらも、自らの罪を受け止めきれず「アイデンティティの不確かな、激しく不安な」脆さを露呈する「青年」へ「共振れ」してゆく様を捉えてきた。そして、そこには中上の〈自己が、変容を強いられた局面に伴う痛み〉を捉えようという志向性があることを明らかにした。本章では、上述の点と、〈親殺し〉を明確な主題としてもつ短編「蛇淫」との関係を考察する。まず、〈親殺し〉を書くにあたり中上が上田秋成「蛇性の姪」を参照した意図を明らかにし、続いて「蛇淫」のテキストで主人公が〈親殺し〉にいかに向き合うのかを具体的に検討してゆく。

2-1. 上田秋成の系譜に自らを連ねる企図

「はじめに」でも言及したように、「蛇淫」は中上の諸作品の中で唯一、文字通り〈親殺し〉を描いた短編小説である。短編集『蛇淫』刊行時に著された「夢の力」というエッセイで中上は、「蛇淫」という小説を書いたのも、新聞の記事にその夢の力を感じたからだだった。それは千葉で起こった親殺しの事件だった」というように、「蛇淫」は現代の〈親殺し〉に材を採ったものであることを明言している¹⁹。

この「夢の力」とは、先章で若干触れたように、「ひとつネジがまわりすぎるとこの身がやってしまうものとして」他者の〈犯罪〉に共振れしてしまう中上の感性的な過剰性を換言したものである。この点から、「蛇淫」は「彼」を主人公とする三人称小説であるが、「彼」という転換子が「私」＝中上自身をも指示する二重性を帯びているとも言う。幾多の旋回を経て、〈親殺し〉という基層的な欲望＝「物語」を自らの小説の主題とし、それに対峙するに至った中上が、その決意の糧としたのが上田秋成の存在である。「蛇淫」というタイトルが「蛇性の姪」を参照していることに象徴的だが、中上はこの時期、自らを上田秋成の系譜に位置づけようとしていた。

「秋成とは、単なる人間の名ではない。なにもかも抑圧下に繰り込み、その抑圧に違和を唱える者や齟齬を起こすものを排除し、さらに排除した者にも新たな抑圧を加える作用を持つ物語への邪悪な意志そのものだと言った方

¹⁹ 中上健次、『夢の力』（講談社文芸文庫 現代日本のエッセイ）、講談社、84頁、1994年8月10日。

がよい」²⁰。後年、「物語の系譜 上田秋成」において如上の要言を獲得するに至った中上のその企図の端緒と核心には、「父」「母」という絶対的な起源＝法・制度とその「子」たる「私」とが切り結ぶ争闘の「物語」として、秋成の諸作を読解しようという試みがあった点にまず留意したい。

だからこそ、最も悲惨な帰結である〈親殺し〉を聊かの躊躇も反省も垣間見せずに平然となしてしまう「肯定」の論理を持つ「樊噲」が、中上の様々なエッセイで理想化されてくる。〈親殺し〉を一切の躊躇なしに行なうことは、もはやコンプレックスを超越しているからだ。

2-2. 「蛇性の淫」への共振れ

だが、不思議なことに、文字通りの〈親殺し〉が現勢化した唯一の作品である「蛇淫」は、そのタイトルが明白に示すように、〈親殺し〉を主題にもたない「蛇性の淫」を典拠に据える。このねじれをどう捉えるか。

「蛇性の淫」は、その梗概を示すと、①新宮三輪崎の裕福な漁師の二男である主人公豊雄が、蛇の化身たる美女・真女子と生涯の契りを結ぶ→②その霊異に恐れをなし逃げ出した豊雄の新たな婚約者たる富子を得る→③真女子は富子に乗り移り、関係の修復を求めて恫喝する→④豊雄は真女子の憑依を解くために「此富子が命ひとつたすけよかし。然（て）我をいづくにも連れゆけ」と自己犠牲をいとわぬ態度を見せ、法海和尚の強い霊力を助けとしつつ毅然と真女子に対峙することで、最終的に真女子を調伏し鉄鉢に閉じ込めることに成功する→⑤豊雄は、真女子の呪縛から富子を救い出すことに一旦は成功したものの、「病にそねみてむなしくなりぬ」という形で富子を失うという大きな痛手を負う、という異類婚姻譚の結構を持っている。こうした筋書きは、蛇女房譚である『警世通言』中の「白娘子永鎮雷峰塔」（以下「白娘子」）と道成寺説話を主たる典拠としているが、その両典拠における、蛇の怪異を法力により退け主人公を救いに導く「仏教の勝利」を寓言する構図を、富子の死を導入することで切り捨てている²¹。嶋田彩司がいうように、この

²⁰ 中上健次、『風景の向こうへ 物語の系譜』（講談社文芸文庫 現代日本のエッセイ）、講談社、214頁、2004年12月10日。

²¹ 嶋田彩司、「典拠と批評―「蛇性の淫」と中上健次」、国文学研究(136)、34-35頁、2002年3月。

点が典拠からの大きな逸脱、すなわち秋成の「翻案」の要である²²。

だが、中上は「仏教による救済」という大きな「法・制度」を交わすこの秋成の創意よりも、その過程で浮かび上がった、一度は恋に落ちた蛇の化身たる女の怨念を苦心して退け、父母があてがった相手との婚姻を通じて家族たちが属す人間界の秩序に再編入されてゆく豊雄の悲哀＝「父」「母」への敗北が表面化されたことに見ていた。中上は「物語の系譜 上田秋成」の中で、「蛇性の淫」のかような「弱さや平板さ」に着目し、それが「近代文学や現代文学を挑発しつつづけている」と論じている²³。したがって、「蛇性の淫」に準拠した中上の意図は、〈親殺し〉においてなお「父」「母」に敗北してしまう「子」の「物語」を仮構することにあつたと見てよい。

2-3. 「蛇淫」における「子」の「弱さ」

では、中上は〈親殺し〉に際しての「子」の「弱さ」をいかに描いたのか。

「蛇淫」は、順という青年が、かつて彼の家族が暮らしていた共同体たる「路地」からやってきた幼馴染のケイという女性と同棲し、それに反対する両親を殺害する物語で、先にも述べた通り執筆の前年に千葉で起こった事件に材を取ったものだ。生活力の無い主人公が家族との関係に苛まれて暴力に引き込まれてゆく過程や、大切な一人息子を奪われたと邪推する主人公の母の目線を通じてケイの性が「蛇」と形象される点にのみ、「蛇性の淫」との通路が築かれているという意味では、「翻案」を遥かに超えた位相で書かれている。

さらに対照すれば、豊雄が「常に都風たる事を好」む文学青年であるのに対し、「彼」はそのような教養を持たない。また、順が殺したのは彼の母によって、真女子同様蛇の化身の位置に置かれてしまうケイではなく、ケイの排除を図る両親である。これほどまできれいに対蹠性が構造化されているならば、「彼」の〈親殺し〉は、「蛇性の淫」の豊雄のような「父」「母」のもとへの帰順ではなく、「樊噲」のような清々しい〈親殺し〉に帰結するかに思われる。以下に「彼」による〈親殺し〉の下りを取り出そう。

①女は泣きもしなかった。平然としたものだった。蛇口につけた短かく切

²² 嶋田彩司、同上。

²³ 中上健次、前掲書、191頁。

ったホースの先をつかみ、水を流しながら、粉石鹸をまき散らし、浴場のタイルをこすった。(.....) 吐き気がする。父は、ほとんど無傷のままに見える。血は、母の額から流れ、首筋、腕、それにスカートについている。スカートはめくれあがり、太ももとパンティがみえる。母の性器の形がパンティに浮いている。浴槽に女と二人がかりで放り込んでからか、それとも、諍い、額を灰皿で殴りつけられた時、思わず小便でももらしたのか、濡れている。母の性器、それも、女のように昂ぶると濡れたのだろうか？ふっと、彼は思う²⁴。

②「あの子はいやよ、絶対にいや。あの子が、おまえやお父ちゃんをみつめる眼をみてみ」「おれまでか」父はわらう。「あんたにまでよお」母は叫ぶ。「眼から淫乱の炎が出とる。男には、わからんのよ。それにそろいもそろて、うちは淫乱の女に弱い男ばっかしやからな」「お前が淫乱でなさすぎるのところがうか」父が言う。いまでこそそう思う。そんなに、灰皿で、いきなり殴りつけるほどのことでもなかった。一瞬、その時、体が燃え上がる気がしたのだった。彼は、思った。女は、素裸だった。これが蛇か、と思った。(.....) 女の髪をつかみ、揺さぶった。おれにとりついて、ここまできて、おれをみすてるのか、と思い、「順ちゃん、順ちゃん」と言う女を、ベッドからひきずりおろした。髪をつかんだまま、女の額を、床のじゅうたんにこすりつけた。父が、母にやったことと、まったく一緒じゃないか、と思った。女を離した。夢であってほしかった。いや、これが本当だ、と思った。(.....) 殴ることは要らなかった。女を好きなら家を出ればよかった。なにも、女は、この女一人だけではなかった。涙が眼にあふれた。(.....) 家に火をつけ、二人を火葬にして、車でいけるところまで行き、汽車に乗り、天王寺にでも出ようと思う²⁵。

〈親殺し〉の事後が描かれた①においては、両親の遺骸に対し、一向後悔の念を差し挟まず、凌辱的な振る舞いをみせている「彼」が立ち上げられている。②は、両親を殺害する経緯と、凶行に及んだ後「彼」と「女」が性交に及ぶシークエンスである。殺人という重大事の後に「彼」「女」の性交を描き置くことは、①同様、「彼」の「樊噲」さながらの悪漢振りを剔抉しているか

²⁴ 中上健次、『蛇淫』（講談社文芸文庫）、講談社、9-10 頁、1996 年 9 月。

²⁵ 前掲書、34-36 頁。

に見える。しかし、その直後、「彼」が「女」を理由無くいたぶる時、恐ろしい自覚が兆す。「父」の「母」に対する暴力を自らが反復している、という自覚である。それが直情的な反復であるが故に、決定的で恐ろしい。この自覚は、「家に火をつけ、二人を火葬にして、車でいけるところまで行き、汽車に乗り、天王寺」に出てみたところで、決してぬぐえない。だから「彼」は惨めに「涙」するしかない。「父」「母」に揺るがし難く呪縛されてしまっている「蛇淫」の「彼」の「弱さや平板さ」は、「蛇性の淫」のそれを遥かに凌駕している。

ここには、〈親殺し〉の当事者としての主人公がその「事実」を処する際に、一度は平然とやり過ごす凶漢さながらの振舞いを見せるも、排除したはずの「父」が自らのうちに〈反復〉というかたちで回帰する、いわば「私は私である」の賓辞の場所に「父」が代入され「アイデンティティの不確かな、激しく不安な」状態に至る「彼」の姿が明確に描き込まれている²⁶。

おわりに——「事実の肯定」の手前にとどまること

ここまで、「蛇淫」には、〈親殺し〉の「事実」を「それ何事かは」と「肯定」できず、「父」「母」に決定的に敗北し、善悪の彼岸の手前に立ち止まってさめざめと涙するほかない「子」の「弱さ」が現勢化していることを確かめてきた。こうした筋運びには、2章にてエッセイ「地図の彼方へ」の分析において確認した、〈親殺し〉をめぐる中上のアンビバレンスが投影されていることは言うまでもない。

ここにきて、〈親殺し〉をいかに処するかという問題に、埴谷の自同律の不快の問題を接続した中上のある戦略性が仄見えてくる。それは「私は私であることが不快である」という認識のうちに可変性へと開かれてゆく「私」を寿ぐのではなく、可変性へと開かれるがゆえに受難する「私」を「父」「子」

²⁶ いみじくも、中上は「方位 73」という一九七三年に書かれたエッセイにおいて江藤淳がランボーの「われは他者である—Je est un autre」という言葉について論じた一節を引き、このランボーの掲げた一つの定式を「それはまた小説家としてのぼくの音楽でもある」というかたちで引き受けつつ「〈属辞〉の場所に好きこのんで行ったのではない。いやおうなしに〈属辞〉の場所にこの身をさらすことになったのである。好きこのんで「父」になるのではない。人はいやおうなしに「父」になるのである」(『中上健次全集 14』、333 頁、初出『日本読書新聞』、1973 年 12 月 17 日発行)と述べていた。

の〈反復〉劇のうちに描き出そうという企図である。

そうした「子」の弱さや脆さが、「蛇淫」が書かれたまさにその直前に産み出された「岬」や、その続編たる『枯木灘』ににも、ありありと書き綴られていることをここに記銘されたい。自らの娘を妾として囲っていると噂されている実父を嫌悪する「彼」は、その異母妹を犯すことで「その雄と決着をつけ」ようとする。だが、そうした、実父への痛打を期しての捨て身の挙措は、実父の近親相姦という「けもの」じみた身ぶりの〈反復〉でしかなく、したがって「あの男の血」を自らのうちにあふれさせる事態に逢着する。『枯木灘』では、主人公「秋幸」は実父が母とは別の女に産ませた子、つまり異母弟にあたる秀雄を突発的に殺害する代補的な〈親殺し〉に手を染める。しかしそれは、かつて自分を何度も殺そうとした異父兄の位置に自らが立つという〈反復〉でしかなかった。

「岬」「蛇淫」『枯木灘』では、〈親殺し〉を志向する過程で、「私は私である」の賓辞の位置に、憎悪の対象としての「父」のみならず愛憎半ばする感情を向ける「兄」までもが代入され、その都度に精神の痛苦に喘ぐ「子」の「弱さ」が立ち上げられている。中上は、「樊噲」のごとくには〈親殺し〉の「事実」を「肯定」しえない「子」の「弱さ」をこそ、「肯定」しようとしていたのである。